

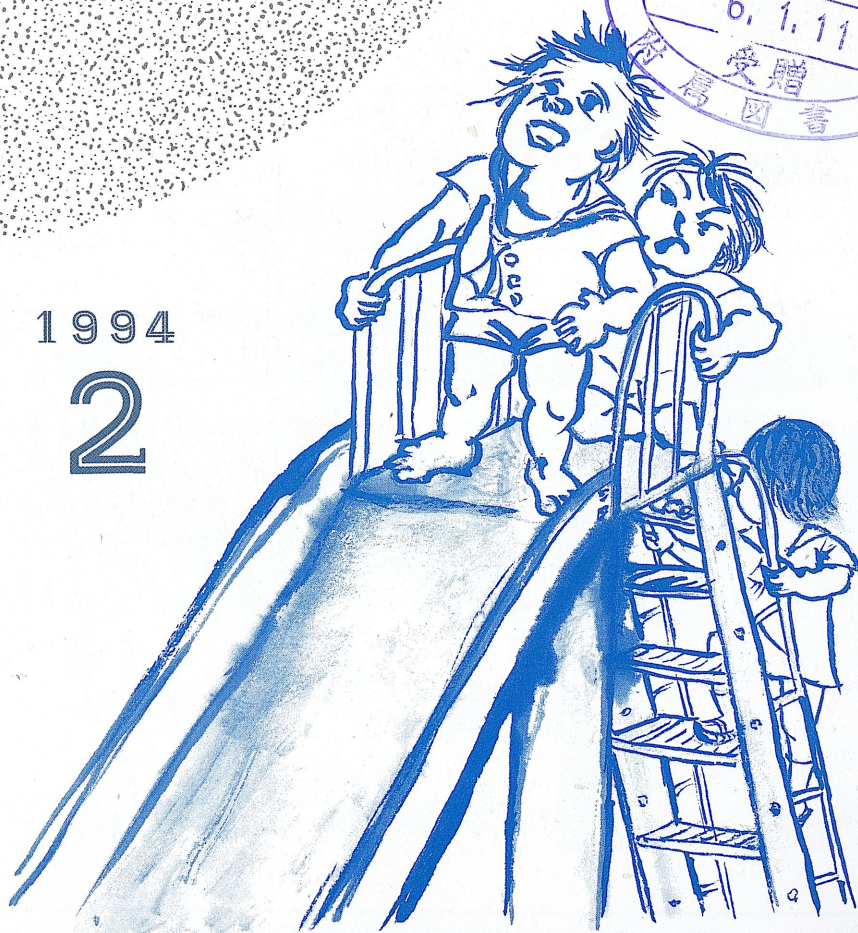
家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育



1994

2



第93巻 第2号 日本幼稚園協会



## 子どもの発達相談 一園と家庭の連携のために



園と家庭の連携は子どもの発達を正しく理解することからはじまります。そのためのハンドブック。

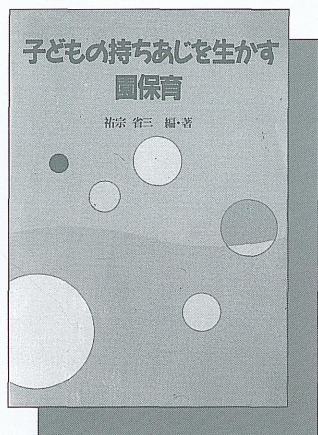
園の先生と、親とが子どもの育つ姿を正しくとらえ、理解することは保育の第一歩。90項目のポイントに分かりやすく丁寧な解説をつけた子どもの発達相談です。先生ばかりでなく、親にもすすめて、ともに読み合うこともできる幅広さをもった育児ガイドブックです。



柴崎 正行・著

A5判・240頁・定価1,800円(税込)

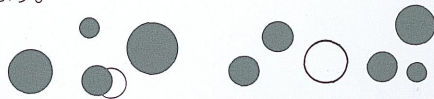
## 子どもの持ちあじを生かす園保育



一人ひとりの持ちあじを生かす園保育の考え方から実践まで。

早いけれど荒っぽいものを作る子、遅いけれどきちんと作る子など、いろいろな持ちあじの子の実践例を集めて、指導の基本をまとめた本です。

個性を育てる保育に悩んでおられる先生方におすすめします。

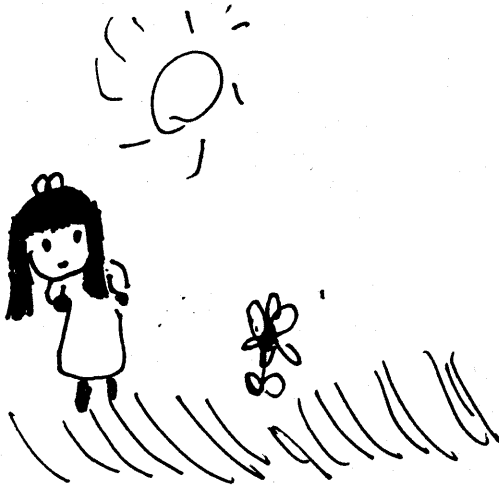


祐宗省三 編・著

A5判・240頁・定価1,700円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

# 幼 児 の 教 育



第93卷 第2号

幼児の教育 目次  
 — 第九十三卷 第二号 —

写真・子供讃歌……………(4)

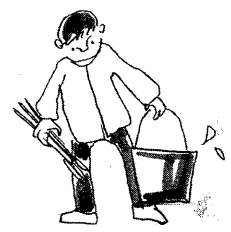
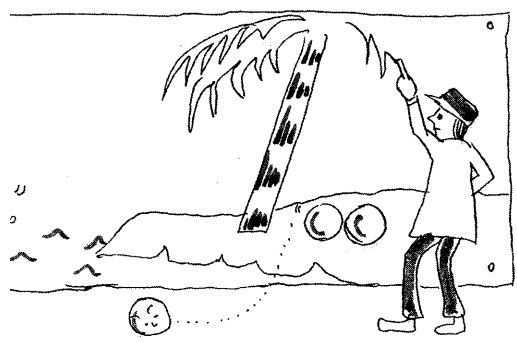
身体の情性をひき止める力……………津守 真…(6)

「子どもの権利条約」を巡って(4)……………境澤 和男…(11)

うるわしい子育て日記 (上)……………村田 修子…(20)

婦人宣教師、ミセス・プラインの「おばあちゃんの手紙」(12)…小林 恵子…(30)

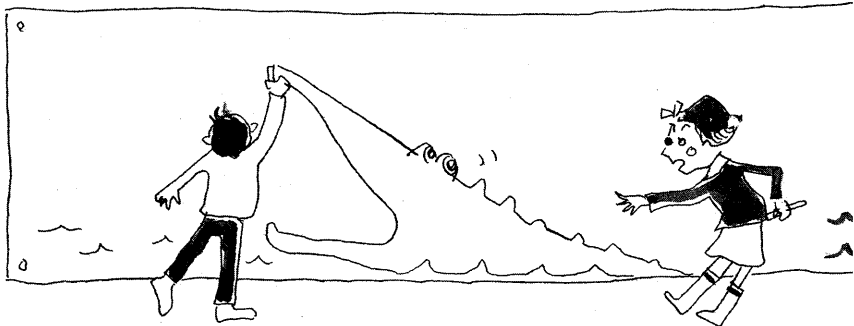
© 1994  
 日本幼稚園協会





手をつなぐ……………	田中三保子……………	(40)	
子どもたちへのまなざし(6)	マフラー作り (一)……………	松井 とし……………	(48)
かるーい読み物のページ	「猫の見た子供たち」……………	K・M・H……………	(50)
ある日の育児日記から(38)	……………	佐藤 和代……………	(56)
堀合先生に学ぶ(1)……………	……………	立川多恵子……………	(57)

表紙・梅田 なほ／扉題字・堀合 文子  
 扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児  
 カット・福田 理恵  
 編集委員・本田 和子／田代 和美  
 榎田 正子・田中三保子  
 編集部・大沢 啓子





撮影・平野 清

# 子 供 讚 歌





# 身体の惰性をひき止める力

津守 真

一、

前号に、私は「一日の保育を終えて、何と多くのことをしたかと思う。しかし振り返ってみると、何をしたのか、いろいろ思い出せない」と記した。朝、保育がはじまる前に、子どもと出会い交わる覚悟を新たにしても、子どもの顔を見ると、その日その時のやりとりの中に巻きこまれ、次から次へと起こることに追われて忽ちのうちに一日は過ぎる。そして保育が終わってすぐには何も思い出せない。ただ身体の中のほてりと疲労が、何か大切なことをしていたことを証してくれる。

ひとつひとつの場面では、思い切って子どもの側に身をおいて応答することに自らのエネルギーを費やしているのに、あとになってそれらを思い出すことができないのは何故なのだろうか。

それは保育が肉体を使う仕事であることに大きな理由があると思う。言語によって示される理念は、保育者の肉体を通らなければ、子どもとの間で実現されない。理念が肉体に化する時には、ひとつずつの行為は、最初の意識によってコントロールされるのではない。身体は、その底に沈澱している慣習化された自動的思考様式を含む生活全体の無意識によって左右されることが多い。身体を動かす作業においては、心身ともに疲労せず済ませようとする保守的、保身的、衝動的な人間の傾向が優先しやすい。その情性を途中で引き止めて、初心の原点を思い起こさせる力を必要としている。

私がいろいろのところで強調してきた「表現と理解」の保育実践における役割はここにあると思う。ひとつひとつの具体的場面で、子どもの行動を、慣習的な大人の目で見ることを意志的に止めて、子ども自身の表現として見ることに転換する作業である。保育の実践は、たえず新たな具体的場面の連続であり、このことが意識的課題となるときに、保育の場は子どもが主体として生活する場となるであろう。

## 二、

晩秋のあたたかい日、庭の隅のシーソーにT子が両足をかけて立って揺らしていた。だれもそばにいなかったのです、私は近寄って手を出すと私の手につかまった。シーソーのわきに古タイヤが十数本立ててあった。T子はその上へのぼり、不安定に足をかけてぐらぐらと揺らした。私はT子はこのように心も生活も不安定なのだろうと考えた。

若い実習生のAさんが来た。最近T子と親しくしている人である。Aさんは、T子はわざと不安定にしている、自分が落ちてもいいと思っっているのではないかと言った。私はT子が幼稚園の時に担任をしていたことがあり、その経験では、T子は大人に支えてもらいたいので高い所に上ると考えていたことを話した。話しながら、ただ支えられたいために高い所に上るという定形的解釈ではない、Aさんの見方に軽いショックを覚えた。それはいまT子の心に起こっていることを言いあてているように思った。長年この子どもを見ていると、大人は次第にこういうことに慣れてしまっ、傍にいて支えさえすればいいと思うようになるのがこわい。私はAさんに、あなたの見方は新鮮で良いと言くと、Aさんは、毎週火曜日に一回だけの実習生がくるが、その一回に賭けてくる実習生の新鮮な見方が知りたくて、保育の後のミーティングにはかならず参加しているのだと言う。

T子の父親は半年程前に死に、母親も最近勤めに出なければならなくなった。すべてが否応なしにそのように変化した時、T子は一時よりも元気を取り戻したように見えた。T子は予感していたどん底の状況に立ち至り、そのどん底の現実、不安をもって見ていた時よりも優しいものだったことを、担任の先生たちの親しい配慮を通して発見しつつあるのではないか、そのような希望がもてるように接するのが現在の保育者の課題なのではないか、こんなことをAさんと話し合った。

私共が話している脇で、R男が担任のC先生と高い所に渡した丸太の上にいた。今朝来



た時から大声で泣き叫んでいる声が学校中に響いていた。そのR男をC先生が肩の上に乗せて過ごしていた。登校の途中で何かあったらしい。詳しいことは分からないが、自分ばことを話さなくても立派に一人前の人間であるとの確信が、この子の心の中で揺らいだことがあったのではないかと私は察した。

R男は丸太の上を渡るのだが、ときどき手を放すので、そのたびに私共はひやひやする。私が傍にゆくと笑顔をみせて、丸太の上からかかんで私の頬にキスしてくれる。C先生や私につかまって丸太を下りたり上ったりする。私は、こうして三人で対等に穏やかにいられる時を大切にしようと思った。そしてかなりの時間をこうして過ごした。R男はもう泣いておらず、明るい顔でやりとりしていた。

保育のあと、お茶をのんで休むうちに思い起こしたささやかな保育のひとつまである。

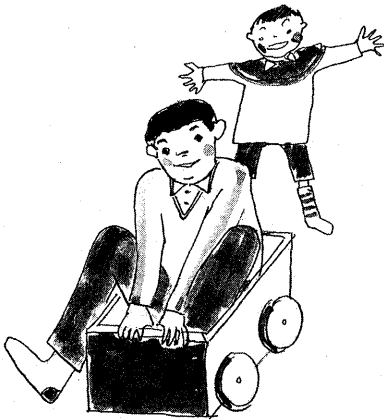
### 三、

次々に展開する子どもの行動を「表現」として意識し直した時、無意識の惰性をくい止めて、子どもの求めにこたえることができる。すなわち、保育者の初心の原点である。子どもが主体として生きる場を、実践的に具体的に展開することができる。

私はこのことを「子どもの権利条約」に結びつけて考えている。子どもが主体として生きるという保育哲学、教育哲学は、長年にわたって国内外の先輩たちによって築かれてきたが、二十世紀末の現在に至って、これが個人の思想の域をこえて、「子どもの権利条

約」として国際的合意となった。このことの意義は大きい。保育者は一方においてその哲学を深める課題と共に、他方において、現代という世界規模の時代に、子どもを社会の担い手として認識するこの横のひろがりをつくる課題を負っている。この後者の点については、時をあらためて更に考えつづけたい。

氾濫する情報に迷わされずに、世界中の保育者と共に、この原点をよりどころとして、子どもが主体となって生きられる場を日々身のまわりに作ってゆくことが、実践における共通の課題である。



(愛育養護学校)

# 「子どもの権利条約」を巡って (4)

境澤 和男

「子どもの権利条約」について何かが言われる時、最も重要な問題として、子どもの権利のカタログの中に、意見表明権、表現の自由、思想・良心の自由、結社の自由、プライバシーの保護の権利など、「権利宣言」に含まれていなかった諸権利が新たに加えられたことが取り上げられることが多い。しかし、これらは、「子どもの権利」、「子どもの人権」という観念ないし思想が承認される限りにおいて、いわばその必然的帰結とも言うべきことであっ

て特に驚くには当たらないことのように私には思われる。むしろこの際必要なことは、「子どもの権利」、「子どもの人権」という観念ないし思想それ自体が人類の歴史にとって持つ意義について改めて深く考えてみるのではないかと思う。そして何よりも私にとって関心があるのは、敗戦後我が国民の間にそれがどう受け止められ、そして今どう受け止められているかということである。そのような立場からここでは、特に幼児の教育の問題に関心の深い読



者を念頭に置いて若干の私見を述べ、与えられた責を果たすことにしたい。

—

敗戦後まだ日も浅いある日、一面焼野原の東京のある場所で偶然出喰した一つの小さな出来事から受けた印象が私の脳裏から今も消えない。時間と共に記憶はかなり薄れ、細かい事実は思い出せないのだが、都電を待つ人の列の中に、年は四、五歳と見える男の子を連れた、うすぎたない（その頃はみんなうすぎたなかった）身なりの母親がいた。その母親が、何がきっかけか分からないが、人前もはばからず、ひどく手荒にその子を扱って子どもが泣き叫び、周りの人々の視線を浴びていた。すると、たまりかねたのか列の中の一人の男が進み出て声を荒げその母親をなじった。「そんなに子どもをいじめるとマッカーサーにどやされるぞ！」

昭和二十二年十二月、「すべて国民は、児童が心身ともに健やかに生まれ、且つ、育成されるよう努めなければならない。」という第一条で始まる児童福祉法が制定され、次いで昭和二十六年五月、「児童に対する正しい観念を確立し、すべての児童の幸福をはかるため」（前文）として児童憲章が定められた。この一連の動きにマッカーサー司令部がどう関わったのか、また我が国の関係者がどのような努力を払ったのかについては説明を省略せざるを得ないが、とにかく、当時国民一般の間では、児童憲章前文に言う「児童に対する正しい観念」という言葉で言われている新しい方向が、敗戦を契機とする諸改革の一つであるということ、また、それが具体的には、親のその子に対する従来の態度の転換を要求するものであると受け止められたのは事実である。マッカーサーを持ち出したのは如何にも当時の日本人らしく、今思い返すといささか複雑な思い

があるが、とにかく当時新しい児童観としてよく言われたのは、子どもは親の思い通りになる所有物または付属物ではなく、社会の後継者として社会が大切に育てなければならぬ、ということであった。児童福祉法がその第二条で「児童を心身ともに健やかに育成する」国及び地方公共団体の責任を明記したことは、このような新しい児童観を端的に表現するものと受け止められた。

ただ、このことには重要な一つの条件がつけられていた。すなわち「児童を心身ともに健やかに育成する」責任を負うのは決して単に国や地方公共団体だけではない。親もその責任を負っているということである。児童福祉法第二条の条文はそのことを「児童の保護者とともに」という文言で明記していた。ところが我が国におけるその後の児童観の転換は、ともすればこの点を軽視して展開するきらいがないではなかった。核家族化、少子家族化の急激な

進行、保育所、幼稚園の急速な増設など事情の変化と並行して、親が自らの子育て責任の負担軽減をひたすら願望する風潮が一般化し、いわゆる施設まかせ、学校まかせの傾向をめぐって改めて子育てのあり方をめぐる論議が高まったこともあった。

## 二

ところで、上述の児童憲章は、我が国における「児童の権利宣言」である。それは一九五一年に制定され、国際連合の「権利宣言」（一九五九年）より十年近くも早いのであるが、それが一九二四年国際連盟のジュネーブ宣言に始まる一連の動きにならったものであり、その精神においてそれと同一のものであることは疑う余地がない。それにもかかわらず児童憲章には「権利」という表現が一切用いられていない。その理由は、概括的に言えば、当時の我が国では、子どもを単なる保護の対象と見るだけで

なく、権利の主体としてとらえる観方がなお未成熟であつたことに帰せられる。そしてそれは単なる表現上の問題ではない。具体的に言えば、児童憲章の各項の末尾をそれぞれ「権利がある」と書き換えればいいと言ふものではない。児童憲章と「権利宣言」(そしてさらに「権利条約」)の文言を比較してみると、前者において抽象的に漠然と表現されている事柄が、後者においては明確に表現されているという相違が見られるのである。次にそのことを一つの具体例について見ることにしよう。

児童憲章は、その第二項において「すべての児童は、家庭で、正しい愛情と知識と技術をもつて育てられ、家庭に恵まれない児童には、これにかわる環境が与えられる。」と定めている。国連の「権利宣言」でこれに対応するのは第六原則である。そこにも、子どもが家庭で育てられなければならないこと、また家庭のない児童には、これに代わる特別の

養護が加えられるべきことが規定されているのであるが、そこでは児童憲章とは異なつて、そのことを実行する主体、つまり両親の「責任」が明記され、さらに「幼児は、例外的な場合を除き、その母から引き離されてはならない。」と、特に幼児についてであるが、それにいわば念を押す規定さえつけ加えている。また、教育について規定している第七原則においても同様に「児童の教育及び指導」の「責任」に触れ、それが「まず第一に児童の両親にある。」ことを明記してこのことを強調している。そしてさらに「権利条約」もこの原則を継承し、いっそう明確な規定を設けている。すなわち第七条には「児童は……できる限りその父母を知りかつその父母によつて養育される権利を有する。」(政府訳、一九九二年三月一三日閣議決定による。以下同じ。)という規定があり、これを受けて第一八条第一項は「父母又は場合により法定保護者は、児童の養育及

び発達についての第一義的な責任を有する。児童の最善の利益は、これらの者の基本的な関心事項となるものとする。」と規定している。

このことはもちろん、子どもの養育の責任を父母にだけ押しつけようとするものではない。「宣言」も「条約」も「子どもの最善の利益を確保するために」負うべき国の責任を明示しているのであるが、後者においては前者におけるよりも一層具体的に詳細に締約国の積極的な措置を義務づけている。ただしそれは、あくまでも、子どもの養育について「第一義的責任」を有する両親に対する保護や援助の措置に外ならない。この原則は、当然のことであるが、「家庭環境を奪われた児童」に対する国の保護及び援助の性質を規定する。すなわちそれはあくまでも家庭に代わる特別のものでなければならぬ。すなわち、国の義務は「里親委託」や「養子縁組」等家庭的環境の設定に対する支援措置（それが不可能な

場合は「適当な施設への収容」の義務）なのである。

### 三

さて、以上に見た「宣言」及び「条約」における、子どもの養育に関する両親の責任の強調の思想をどのように理解すればよいのだろうか。子どもの



権利という思想が一八世紀ヨーロッパに始まる人権の思想の子どもへの拡大適用という通常の理解からすれば、それは子どもの権利を、より積極的に保障しようとする事、つまり、子どもは単に「心身ともに健やかに生まれ育てられる」権利を持つというだけではなく、「両親によって養育される権利を持つのであって、両親によって養育されてこそその権利を保障されたことになる」という、子どもの権利についての一歩踏み込んだ保障の必要を確認するという意味のものであるということになる。しかし事柄は決してそのように単純ではない。現に多くの論者が、「宣言」及び「条約」における両親の責任の強調が、子どもの権利保障に関する国の責任を軽減するものであるかのように誤解される恐れがあり、そのような理解は誤りであること、また、それが育児の社会化の必要と矛盾するものではなく、また両者を矛盾させてはならないと特に注意したりしている

(永井憲一、寺脇隆夫編、『解説・子どもの権利条約』一九九〇年、日本評論社、二二頁 堀尾輝久 『子どもの権利とは何か』一九八六年、岩波ブックレット、三七頁、を参照)。このことは、子どもの権利の保障に関する責任の所在について二つの考え方があり、両者の関係をどう矛盾なく理解するか、問題であること、さらに、現実の社会において子どもの権利の保障を実現する上で、両者の関係を調整することがかなり困難な課題であることを示しているように思われる。そしてそれは、敗戦当時我々日本人が直面した問題、つまり少しく単純化して言えば、子どもは親のものか社会のものかという問題にも通じるものがあるようにも思われる。

#### 四

以上指摘した問題に関連して、プロテスタント神学者大木英夫氏の「近代社会と幼児の人権」と題す

る問題提起（『現代人のユダヤ人化——現代文明論集——』一九七六年、白水社所収）は極めて鋭く、かつ示唆的である。論文の冒頭に次のような言葉がある。「近代社会は成人中心の社会で、いきおい大人のわがままになりやすい社会」である。「だから子供の人權を守るということは、近代社会の根本的弱点を矯正するという深い意味をもった行為なのである。それは単に感傷的な訴えではなく、社会構造全体と構造的に取り組むようなスケールの大きな行為なのである。」それは一体どのような意味なのであろうか。

氏によれば、近代社会を構成する原理は「契約」である。契約は「成人した人間主体、つまり責任をとりうるような主体性」を前提とするのであって、まだそのような責任をもち得ないとされる子どもは、近代社会においては「原理的に排除されて」いるのである。普通一般には、子どもは近代に至って

ようやく人間として認められるようになり、やがて人權の主体として尊重されるようになった、という風に理解されている。子どもの権利に関する思想が国際的に広く承認されるようになったのは近々世紀ほど前に過ぎないとしても、その源流は近代社会を導いた市民革命の思想にあるとは多くの論者が説くところである。ところが、大木氏によれば、大人の人權とそれを前提とする契約社会としての近代社会は、子どもを位置づける場所を本来持たない。ここでは子どもはいわばアウトサイダーに過ぎない、というのである。

このような観点から今日の我々の社会における大人と子どもの関係を見つめ直してみると改めて気づくことがある。近代社会の契約原理の具体化として日本国憲法第二四条は「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し……」と規定している。このことは、やがて生まれる子にとってどのような意味を持つのか

だろうか。家庭が契約に基づいて作られるとすれば、その同じ契約に基づいて解消される可能性があることになる。もちろんそのような場合、子の処置についても配慮がなされるのであるが、それはあくまでも第二義的なものであって、責任ある主体としての夫婦、大人たちの意思が第一義的に尊重され優先される（「権利条約」の批准によって、このような場合、何らかの形で子の意見を尊重するよう関係法の改正が必要であるとの意見もある）。すなわち、例えば夫婦の間の愛情がもはや回復し得ない程度に冷え切っていると判断されれば離婚は認められ、その後初めて子の処置について配慮がなされるのである。このような夫婦にとって子どもはもはや「愛のお荷物」に過ぎない。

西洋人の認識においては、人類が子どもを捨てたり殺したりすることを道義的に罪悪と考えるようになったのはキリスト教の生命尊重の思想に由来する

とされている。しかしキリスト教出現以後も捨て児は横行したらしい。やがて捨て児を養育する施設が創られ、その建物には、ひそかに子どもを捨てるものための特別の窓がしつらえられた。捨て児が生命尊重という名目によって合理化されたのである。

その後、捨て児を認め、その子どもの養護を社会が引き受けるという思想は次第に定着し今日に受け継がれている。子どもの権利についての先駆的な書物『子供の権利』（ジャン・シャザル、清水・霧生訳、一九六〇年、文庫クセジュ、白水社）の次の言葉はその証といえるものかもしれない。「年若い母親が嬰兒を捨てようとするときは、たいてい出産の秘密がもれないことを望むものだから、もし墮胎や嬰兒殺しが再び盛んにならないようにしようと思えば、そして、人間関係に不幸な混乱をまねいたり、家庭の平和を傷つけたりしないようにしようと思えば、その望みを叶えてやらなければならない。」

(二五頁)

社会が捨て児を保護し養護するということは、確かに子どもの生命が絶たれるのを防ぐという意味で、子どもの人権の保障である。しかしそのことは同時に、大人である親の、子どもに対する養育の責任を免除し、親の幸福に生きる権利を保障することである。そしてそれは、反対にまた子ども側からみれば、その健全な成長にとって不可欠とされる親による養護を受ける権利を侵害することである。しかもこのことは、子どもの権利の侵害が、外ならぬ近代社会を構成する構造的原理によって合理化されていることを意味するのではないだろうか。

離婚の件数や、いわゆる未婚の母や、共働きの家庭が増加するという、我が国でも起こっている最近の動向は、近代社会の担い手たる大人たちの権利の拡大の現れとして歓迎すべきことなのかも知れない。そして、その結果として生ずる問題は、例えば

母子福祉事業を充実したり、保育施設を増設し、そこにおける保育の質を向上させたりすることによって解決すればよい。それも一つの道であるには違いない。しかし、このような方向での事態の進行と、最近現れている親の自律的教育意識の低下（施設まかせ、学校まかせ、責任転嫁、果ては放任と虐待、子殺し）の傾向とは全く無関係なのであるか。近代社会は、その本質において、このような結果を生み出す矛盾を、その出発点においてすでに内包していたとも言えるのではないだろうか。

大木氏は、近代社会において喪れた子どもの地位を回復しなければならぬと言ふ。そしてそのことは「近代社会の根本的問題性を解決するという大きな作業とならざるを得ない」とも述べている。

(尚綱女学院短期大学)



# うらわしい子育て日記 (上)

村田 修子

「子どもの出生率が年々下がってきている」と報道されているのをよく耳にするし、現実子どもにふれる仕事をしている者には「今年は〇〇園が入園希望者が少ないので閉鎖になった」とか「先生の減員のために、そこに勤めていた卒業生がやめなくてはならず再就職の相談にきた」等々、そのために派生してきた問題がきこえてくる。

どうしてこうなってきたのかを考えてみると、社会状況の変わりようと共に、子どもについての考え方が非常に違ってきていることを感じる。身近に親と接してみる

と、ずっと以前にかかわっていた親と、いまふれ合っている親の感触はことごとくに異なることが多い。特に自分中心のことを運ぶことが一般的な傾向なので、子どものことについて話し合うときなども、基本的なことが全然くい違ってしまふことが多いので、そのへんを一致させる話し合いから始めないと話し合いにも効果が無い、という現状である。

○子どもにかかわることによってこうむる様々な犠牲は  
さげたい

○子どもを育てることの不安、自信のなさ

○めんどうなことはしたくない

これ等は現在の親が共通して持っている点であるし、子ども減少の原因につながっているのではないかと思われる。

今ここに、現代の親には考えられないのではないかと思われる「真心による子育て」の記録があるのでご紹介することにします。失われかけている心の問題を考えるきっかけになればよいと思うものである。

平成四年五月、同じ会社に勤める者同士の若いカップルが誕生した。花嫁は私の姪の長女篤ちゃん。私もそのお祝の席に招かれ祝福を送った。例の如く二人の今迄のことどもが披露され、セレモニーも終わり近くなったとき、石川さんという方から篤ちゃんに特別なプレゼントがあった。

綺麗に包まれた八冊のノートで、篤ちゃんの成長の記録である。

篤ちゃんの両親は当時は共に学校勤務、子どもが生ま

れてご多分にもれず母親は仕事のことを考えた。現在のように保育所等の設備が充分ではない時代だったので、仕事を続けるべく子どもを預かってくれる処を探した。相談を掛けられた私も方々に当たってみたが仲々適当な条件のところはみつからなかった。

暫くたって様子を聞いてみると、勤務先でその話をしたところ、その或る方が「近所の方がみてくれるかも知れない」とのことなのでわらをもつかむ、という気持ちで伺ってみると「自分のところにも二人男の子がいるが小学生になって手が掛からなくなったし、女の子を育ててみたいと思っていた」とのことなので、早速に交流が始まった、ということであった。

私はそれを聞いてとても驚いた。自分に何の関係も無い、しかも三か月足らずの手の掛かる子どもを預かって育てる経験をする、ということ。これは大変なことである。子どもは機嫌のよいときばかりではない。健康状態もよいときばかりではない。そのために大人が犠牲を是らわなければならないことがたくさんある。またこまご

ましく世話をしなければ子どもの心には通じない。

既にその思いをしてご自分の二人の子どもを育てている最中。いくら大きくなったとか、性別が違う、といっても、自分の子どもだけで充分と思う人が殆どだと思ふ。しかもその上、毎日々々の様子等を書いておき、迎えに行つたときに渡して下さり、朝つれて行くとき迄に読んで母親の方からも希望とか報告を書いて置いてくる、とのことであつた。

このことを姪から聞いて、子どもに関係のある仕事をしている私としては、「いつのときかそれを見せてね」と約束しておいたその記録なのである。

「このことを取り上げていいですか」と石川さんに伺つたとき、「結構ですが、全くの素人ですから書いてあることは恥ずかしいようなことばかりです。でも日中のことをおうちの方が知らない、やはりまずいので知らせたい、と思つただけです」と謙遜しておっしゃつたことにまたまた驚く、という状態であつた。

毎日々々書いてあるので、どういうようにしたら石川

さんがなさつたその真心が伝えられるか、と考へてみたが全部というわけにはいかない、先ずは成長の記録としてオーソドックスな型で発育・発達の変わりようや、書かれていることの中で子育てに大変有意義だと思ふことを拾ひ出し、また感銘を受けたことなどについて述べていきたいと思ふ。

昭和四十一年五月二十三日（七十八日目） 雨

七時四十分

篤ちゃん来宅、本日より我が家に仲間入り。『ようこそいらっしゃいませ』大事にお預かりして良い子にお育てしましょう。

風邪気味との連絡に、細心の注意で様子を見る。時々、「くすん」と泣き声を出し乍らも大してむずからない。鼻水も出ない。これなら大丈夫。

九時四十分 お母さんの処の電話故障、お父さんの処へかける。

十時 授乳（ミルク七さじ 一五〇g）

十一時 ぐっすりねむる。

十二時十分 排便あり。ころり二つ。

母親より電話あり、御心配の様子。少しずつぐすり始める。

乳首はなるべくしゃぶらないようにさせる。唇の形の悪くなるのを案じて。抱っこしてあやす、よく笑う。「クーン」とおしゃべり。少しねむる。

二時 授乳、ミルク九さじ、一八〇cc、一〇cc残す。

雨止まず。お風呂は風邪気味なので本日は中止。顔を真赤にして排便一つ。しっかり抱っこして安心させて排便させる。

三時

ぐっすりねむる。お風呂に入れないので、熱いむしたオルでお尻をよくふく。

\*

夕刻は道がこむのでお迎えの頃それにぶつからなければよいと思う。御両親様も何かと大変なことと思えますががんばって下さい。私も受入れ態勢をとりがんばりますから。

五月二十四日 快晴

七時三十分 到着

八時 目をさまし、おもちゃを見て大人しくおふとんの中で遊ぶ。排便。便の具合よい。

九時 天気が良いためか、寝ているのをいやがる。アーン、アーンと甘え泣き。少し抱いて外を眺める。

九時三十分 授乳の準備を始め、十時に授乳。ミルク九さじ、

一八〇cc、終わり頃はき出し二〇cc残す。

十一時 ぐっすりねむる。おむつ洗濯。

一時十五分

入浴、太っているので首のつけ根がくびれている。赤ちゃんらしい結構なことと綺麗に洗う。気持ちよく手足を伸ばしくるくるあたりを見回す。上から下まで着替え、サッパリする。

二時 授乳、全量平らげる。こんな時は嬉しい。

三時

日誌をつけながら、わずかの時間で大分甘えるようになってきたと思う。あやすとよく笑い、またよく話す。

ベッドが届く、赤ちゃんは「知らぬが仏」で無心にねむっているが、私は父母の愛を感じる。よくねている間に入浴後の洗濯をしておもう。

\*

車でのお迎えですが、冷たい雨の中、風邪をひかなければよい、と心配でした。お父様のお姿にホッと致しました。夜、お母様が心配そうに赤ちゃんを抱く姿が眼にちらつきました。梅雨期に風邪をひかせないように注意致しましょう。

### 六月一日 雨（お泊まりをする）

赤ちゃんが来る様になってから、日中の雨は本当に困る。夜充分降って昼間は晴天が何よりだけれど……。

七時三十分

ねむって到着、昨夜の連絡を受ける。ミルクも吐いてしまったそうなの。私は次男でいやという程経験し、情けなくて何回も涙をこぼした。ところが今は冷静に状態を判断するところが出来る。泣き泣き経験した総ての事柄は若い故にあせりがあり、つまずき転び、起き上がりして年をとってゆく。学問とは別の人生経験。

八時 目を覚ましにつこり笑って早速お話し。

九時 ねむる。

十時 授乳、むねり乍ら飲む。昨夜吐いたので無理をさせず残させる。(五〇㉙)

十時三十五分 ねむる。

十一時 抱っこで窓から雨を見る。

十二時〜一時四十分

ねむる。目覚めてから、早く帰ったお兄ちゃんと遊ぶ。

二時 授乳（お兄ちゃんとの問答）

「ママ、人をだましちやいけない、と言ったね」

「そうよ」

「おっぱい首は赤ん坊をだますものだろう」



◀ お兄ちゃんと一緒

「そういうことになるわね。でも人をだますのとは少しばかり違うのよ」

思わず返事に困る。抱っこしているとよく笑う。見るとお兄ちゃんかうしろで一生懸命ウインクしている。思わず吹き出ししてしまう。ウインクするとよく笑う篤ちゃんだそうなの。

三時～五時 ねむったり抱っこしたり、ベッドで一人話しながら

……。

六時 授乳

六時四十分 入浴

朝から雨で少々寒い感じ。今日はお泊まりなので主人と入浴する。手に脱脂綿を握らせて入る。大きなアクビをして気持ちよさそう。主人は入浴させるベテラン。用心深くとても上手。二人の子どもと私と三人で見学。篤ちゃんはクスンとも言わない。

七時三十分 就寝

あたたかそうにぐっすりねむった。(七時間)

午前二時三十分

目を覚ます。授乳、全量飲む。おむつ取り替え。長い時間ねむった為か音をさせてよく飲んだ。ゲップを出してすぐねむる。おとなしい。

六月六日 (満三か月、体重六キロ増)

「今日はおくるかしら、どうかしら……」と思いつつ、早目に起きていつこられても良いように家事を切りもる。

七時三十分 到着、珍らしく目を開けている。

八時三十分 ねむる。起きて排便。

九時三十分 授乳

今迄の経験では一〇〇cc飲むことは少ないので四時間はおなかもたず、三時間半位からミルクを欲しがり始める。本日よりミルクの水分を一〇cc少なくする。

十時

明日保健所に連れて行くので、私の髪が余りぼさぼさでは篤ちゃんが気の毒なのでセットに行く。ピンカールのみ(三十分で帰宅)。美容院での篤ちゃんは大変おとなしく、又抱かれて寝てしまう。

十一時 排便、ねむる。

一時三十分 授乳

二時十五分 入浴、女の子らしくお顔を石けんで洗わせる。

三時～五時

抱っこで遊んだりベッドに入ったり(ふらふら歩いてもらい

たいらしい。

五時三十分 授乳

\*

修学旅行引率から帰ったお迎えのお父さんへ

三日間の篤ちゃんはお兄ちゃん二人に見守られて大事に大事に過ごすことが出来ましたので御安心下さいませ。土曜日のお迎えの日は生憎の雨でもう一日お引止めしようかしらと考えましたが、お母様のお気持ちも大切と存じ雨の中をお帰ししてしまいました。お風呂がすっかり好きになりました、裸にするとう手足を嬉しそうに動かします。

六月十七日

七時四十五分 目をあけて到着

パパ、ママを見送る。分かるかどうか分からないが、一日の出足をよくするために、これからも目を開いているときはお見送りをしたい。



この日もいつもの様に授乳、排便……と日記は八冊になる程続く。最初の方の五日程をあげてみたが、これを見ただけでも全体に流れている気持ちは「してやる……」「してやった……」というのではなく、全く心から幼い者を一人の人として大切にはぐくむ、という純粋さで貫かれている。だから読んでいるとはのぼのとしたものを感じるのだろうと思う。

その書かれていることを改めてよく見ると、「……私は心理学を勉強したこともないし、全くの素人ですから……」と言われていたけれども、どうしてどうしてどこをみても理にかなってすばらしいのである。例えば

○ この日記を書くことになったきっかけに、「自分の子どもが日中どうしているかを知らないのは問題」と思った、とあるが、それは基本的に一番大切なことなので、それを考えて下さったことは素晴らしいことである。現在の親の多くは「子どもをお願いする処があつてよかつた」とか単に「お預かりしている」という便宜上のところで終わってしまうように思われる。

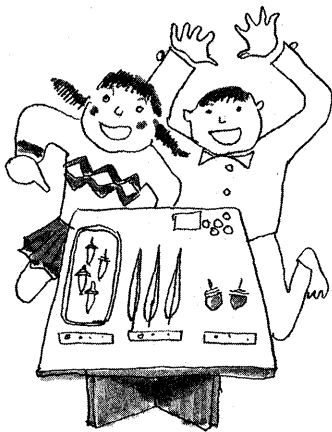
また「我が家に仲間入りした」というのも単にお客様ではなく、家の者という最も近い関係として受け入れたことが感じられて温かい雰囲気と思われる。

○ 健康を保つ為に大切な排便のことが常に書かれているので重視していることが分かるし、その為に安定した気持ちでさせる方法を工夫したり、そのあとお湯で拭いてさっぱりさせる。めんどうがらない心使いは幼い心の中に残るのはたしかである。そしてこれが大切なのである。

○ 朝、相当早い時間に活動を始める。これは親にとっては毎日大変なことであるが、子どもは習慣になれば大丈夫なのである。そこで感心したことは、送ってきたパパやママと別れるとき、「分からないことは知っているが、見送るようにする」ということである。赤ちゃんは生まれてくる前からおなかの中で夫婦の会話を聞いているといわれる。周りの大人が納得できるものではないが感覚的に体得して、それが自分のものになっていくのだということを感じていらっしゃる。

ることが素晴らしい。

○ ご自分のお子さん達に他の人のことも真剣に考えることの必要なことを身を以て教えていらっしゃるように思う。幼い子が身近にいることにより、その年齢なりに個々が確立していく。大変上手な教育法であると





もいえる。また子どもの言ったことを取り上げ「教えられた」と素直に認めていることが子どもの進歩につながっていく。

○ その他、乳首のおしゃぶりをなるべくさせないことや、泣き声で甘えていることが分かったり、抱いて雨を見るなどこせこせしないでゆったりと子どもと生活している。これがどんなにいいことか、そうして頂いたことはとても幸せなことである。

最後におお小母として一番有難いことは、六月六日のように「今日ほくるかしら」と楽しみに待っていてくれる。その気持ちは、知らず知らずのうちに篤ちゃんにも、母親にも感じられることである。

また若くて経験のない母親に対して、その本当の母親、またおばあさんが言うようなこまごました注意を日誌の各所につけ加えてある。分かっているが、それを仲々実行できていないことを衝いている。これを素直に受け入れて子どもに対していけば間違いない、という感じである。

日誌は毎日毎日サツと書かれているようだが、傍らに赤ちゃんをおいて、もう一方では母親として、また一家の主婦としてその間をさいいての記録は、さぞ大変だったろうと思う。

ちなみに私も四十年程前、自分の子どもが生まれたとき意を決して一日一日の変化を書いて矢張り結婚したときに渡した。自分の子どものことであっても本当に努力を要した。

娘はそれをもたらしたときは一通りのお礼を言っただけだったが、自分の子どもが中学生になった頃「あれ大事にしているのよ」と私に言ってくれた。もらったそのときよりも、母親としての経験をつみ重ね、喜びも苦労も味わって一応落ち着いてきたとき、初めて自分の育ちを改めて考えてみよう、という気持ちが出てくるのではないかと思われた。

それ等も少しあげてみようと思ったが、家に手を加えるのに荷物を動かして身近にないのでできないが、生まれ一週間位してからまつ毛が生えてきたのをみて驚

いた。"と書いたのは覚えてはいるが、どうも私の日誌には日中のいろいろな事柄が抜けている。矢張り朝晩しかゆっくり抱っこしなかったからだだったと思う。それに自分の子どもものは忙しさに負けて流されてしまい易かったからだとも思う。

先日家の中を片づけをしていたとき、孫が使ったお皿が出てきた。

#### 一枚のお皿

白くて縁が少し上がっている中皿、涼しげな水色で絵が書いてある、おすわりしてる熊、可愛らしい花、丸い輪の煙を吐いた おもちゃの汽車、小さなお客様がのっている

見ていると、不器用にスプーンを動かして小さい口に運んでいた頃がすぐ思い出せる。

いろいろ思い出して感傷にひたっている私のそばで、

見上げるように大きくなった孫いわく、

"なんじゃこりゃ一体?"と、やや照れくさそうに

言ったことばに、おばあさんたる私はダーッ。

でもしあわせ。ずっと以前のその時にすぐもどれるから。

身の回りに子どもがいて孫がいて……そういう環境の中で過ごせる人生は何にもかえがたいものであるし、子どもは本当にすばらしい存在である。決してうるさいだけのものではない。

これを書いている途中、或る新聞の記事に「いま子育てに関する本がよく読まれるようになりブームになってきている」と何冊かの本が紹介されていた。その現象が実際に子どもを育てることにつながっていくことに期待を持つものである。

(洗足学園短期大学)

婦人宣教師、ミセス・プラインの  
「おばあちゃんの手紙」(12)

～アメリカン・ミッション・ホームの  
創立者の一人～

小林 恵子

二八、

片瀬 一八七五年八月二日

愛する子どもたちへ

朝からの雨ふりで、子どもたちは狭い家のなかに閉じこめられ、私のまわりを休みなく動きまわって遊ぶものですから、そのそばで手紙を書くのは容易なことではありません。でも、私たちのホームの仕事とこの子どもたちにとっても関心をもって下さっているアメリカの皆さんたちに少しおしゃべりがしたくて手紙を書くことにしました。

私、が皆さんたちにお話ししたいのは、ホームの子どもたちの幾人かが夏休みをどう過ごしたか；費用があまりかからずゆっくりと夏休みを楽しむために私たちがどんな事をしたかということです。

私たちのホームのなかで九人の子どもたちは夏休みの間も帰る家がなくて可哀そうなので、この子たちのために私たちが何かしてやれることはないかといろいろ考えてみました。相談のあげく、どこか美

しい空気と景色を見て気晴らしの出来る田舎へ連れて行くという結論になったのです。でも、それは私にとってかなり難しいことだったのです。何故かという皆さんたちにもおわかりのように私は日本語がまったく話せないし田舎の人々は英語が理解できないからです。それに、この子どもたちの何人かは英語が話せないし理解できないのです。けれども父なる神は私たちが子どもたちに楽しみを与えるため何か良いことをしようとするときには必ず助けて下さると私は信じていました。故国アメリカから日本に来て以来、神はいろいろな方法で驚くほど私たちを助けて下さっているのです。ですから私の心はいつも神への賛美で一杯です。そして、他の人々を幸せにしようとして働くとき私は自分が神から一番たくさん祝福を頂いていることが判るのです。

さて、私たちが借りた日本の民家は海岸にあって丁度向かい側に海の水が打ち寄せる長い砂浜が続き、江ノ島という神聖な島につながっています。こ

こは外国人にとっても夏の行楽地として有名な場所なのです。また、この島には多くの神社があって、そこにお参りする巡礼の人々が大勢やって来て賑わうのです。島のなかに有名な洞窟があって、そのなかに数えることの出来ないほど多くの神像があり、それを拝むために人々がやって来るのです。このように人が大勢集まる場所に行くのは私たちにとって望ましい事ではないのですが、私たちのいるこの小さい村は海辺にあって皆が楽しめますし、行きたい時はいつでも島の方へ歩いて行けるのです。私たちの泊まっている素敵で小さな民家を絵にかいて送ってあげられるといいのですけれどね。外から見ると壁はペンキが塗ってなくて黒い板だし、屋根は重いわらぶきであり綺麗に見えないのですけれど、私たちの住んでいる家のなかはみんな新しくして清潔とても工夫されてつくられています。床の畳や白い紙のふすまなど素敵です。ふすまは好きなように動かす事ができ、思いのままに部屋を大きくも小

さくもすることが出来ます。私たちの家は母屋と別棟に建っていて、部屋のまわりに小さな縁側がついています。この縁側と部屋のなかのマットの上は靴をはいたまま歩くことができます。私は子どもたちが家のなかを裸足で歩きまわるのがどんなに楽しいことか、しみじみと判りました。暑い気候の地方に住む子どもたちはみんなそうなのでしょうかね。この小さな子どもたちはホームに来る前には自分たちの家でいつも裸足で走りまわり畳の上で眠っていたのですからそうすることが嬉しくてたまらないらしいのです。それは確かにこういう暑い気候の間は結構なことだと思います。でも、私たちのホームに帰ったときにはどうでしょうかね。私たちはこの子どもたちに知性あふれた淑女に育って貰いたいし、西欧諸国の婦人たちのように文化的な生活をするよう人々を指導して欲しいと思っています。

昨日、私たちは一そののボートを借りて江ノ島へ出かけました。この島は巨大な岩が恐ろしい地震か

何かによって海のなかから外へ突き上げられたような格好をしています。その側面はぎざぎざで恐ろしい形をしていて、底の方においていくと数えきれないほどの小さな洞窟があります。私たちはこれらの洞窟の一つの中へ入っていきこうとしましたが潮の満干と流れでとても危険で行けませんでした。また、大きな洞窟の一つで、なかに沢山の像が祭ってあるのを見ようとしましたが、大勢の人々がその見事な洞窟を見ようとして混雑しているので小さな子どもたちには危険だと思って中に入るのを止めることにしました。子どもたちも私の意見に従ってくれました。

ある日、私たちは一そののボートを借り海岸に沿って三マイルほどいったところにある鎌倉の大仏を見に行きました。この大仏は世界で最も大きくて古い仏像で日本へ来る外国人の誰もが行って見たいと思っっているものなのです。ですから、この子どもたちもこの小さな田舎の村に来たおかげで素晴らし

く立派な興味ぶかいものを見ることができたというわけです。子どもたちは毎日、海辺に駆けて行って広い広い太平洋から打ちよせる波に大喜びして海水浴を楽しみました。海水浴は子どもたちにとって本当に面白くて楽しいことですから、着物を着たり脱いだりする更衣場がなくて便利が悪いことなど気にするようすもなく楽しんでいきます。でも、私にとつて更衣場のないのは困ったことで、人力車のそばで日傘をかざしてテントをつくり、そこを更衣場にしました。その人力車は二人の小さい子どもとみんなの海水着を運ぶために頼んだのです。なぜかという、海岸の砂は足が深くすくわれるので大きい子どもたちは何とか歩いて海岸ぞいに続く砂丘を越えることができるのですが、小さい子どもたちには無理だったのです。

この家の持ち主の母屋のお爺さんは大の子ども好きでいつも私たちと一緒に海に行つて小さい子どもたちの世話をしてくれています。この老人が子ども

たちに囲まれてとても幸せそうにしているのを見ると、この子どもたちにとってだけでなく、この老人にとつても私たちの滞在が彼の生活に楽しいひとときをもたらしているのではないかと思いました。何日か前、彼は竹で何本かの釣竿を作ってくれ、子どもたちみんなを魚つりに連れて行つてくれました。



賢い年寄りの釣り師によくあることですが魚はあまり釣れなかったようです。でも、子どもたちは籠の中に魚が一杯入っているかのように大喜びで帰ってきました。

あなたたちが聞いたらきっと喜んでくれると思いますが私が私たちの子どもたちはこの村の人たちに歌を歌って聞かせたのですよ。私は子どもたちにこの小さな宣教にそれが一番良いやり方だと話しました。子どもたちは日本語に訳されている大好きな讃美歌を幾つか歌いました。

「I am so glad that our Father in Heaven」

(註1) 「I am Jesus Little Lamb」など、聖書物語にでてくる私たちがよく知っている讃美歌です。私はこの人たちが理解できる日本語で子どもたちが歌うのを聞きながら胸が一杯になり、心のなかでそっと祈りました。この異国の地にこのようにして幾つかの種が蒔かれ、根をおろし、神の栄光のため幾つかの実を結びますように」と。

あと二日のちに私たちはホームに帰り、夏休みの残りの日を過ごしますが子どもたちにとってこの村での生活はとても楽しくて皆が大変元気になったと思っています。

それから、この子どもたちが歌を歌うのを聞いたり、毎朝、毎晩ひざまずいて神に祈る姿を見た人たちがそれに心をとめ、私たちのホームとそこで教えている宗教についても知りたいたいと思うようになりますようにあなたたちにも祈ってほしいのです。なぜならこのようにして日本の国の隅々まで神の祝福が注がれることが私たちの願いなのですから。

いつまでも、あなたたちの愛するお友だち

メアリー・プライン

\*

二九、

横浜 一八七五年八月二九日

故郷の可愛い孫たちへ

私は今、あなたたちに日本からの最後の手紙を書いています。私はあなたたちに会いたいとどんなに思いこがれてきましたし、故郷の懐かしい我が家に再び戻れるかと思うと喜びで胸が一杯になるのですが、私にとってこの大切なホームを去ることは本当につらくて最後の決心をするまでには身を切るような苦しみをしました。

あなたたちは私の健康がすぐれないことをもう聞いている事と思います。私の身体の具合があまり長いこと良くならないのでどこか違う気候のよい所へ転地したほうがよいという事でここを離れる決心をしたのです。これも主の思し召しだと思ひそうすることにきめました。

私はもう二度と日本からあなたたちに手紙を書くことはできません。でも、私があなたたちにこの国のことや私たちのホームと学校のことについて書いたことを心におぼえ、日本での働きに関心をもち続

けてほしいのです。

おばあちゃんがこの可愛い子どもたちのいるホームを去ったからといってあなたたちまでがこの子どもたちの事を忘れてしまったり、この子どもたちの教育のために皆がしてあげられる援助をやめるなんてことはしないで下さいね。

このホームも学校も今ではますますのこぎつきました。そして、神さまはここで私たちの仕事をすべて大変すばらしく祝福し助けて下さいました。でも、この仕事はずっと続けていくべきですし、年ごとにますます大きく成長し、より人の役にたつ学校に育っていく為にアメリカのお友だちのみんなに援助をずっと続けていってほしいのです。

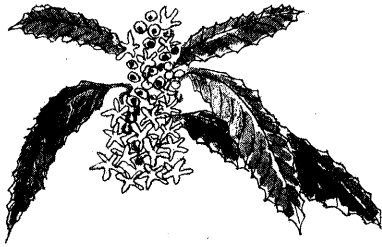
私はあなたたちがこれからも日本を愛し何か自分たちで出来ることに手をさしのべて下さることを願っています。

今、私は愛する孫への「おばあちゃんの手紙」を終わるにあたってM・G・ブライナード女史に頼ん



で書いていただいた美しい詩をここに載せます。どうぞ、あなたたちみんながこの詩の心を心として成長して下さいね。

あなたたちの愛する おばあちゃん



「おばあちゃんの手紙」の二八は、夏休みに帰る家のない子どもたちを楽しませようと、横浜から近い片瀬・江ノ島の海岸で日本の民家を借りて過ごした幾日かの記事である。当時の江ノ島は洞窟のある神社の島として賑わったようであるが、片瀬の海岸は小さな漁村で海水浴を楽しむ人々はまだ少なかったと思われる。子どもたちは毎日、泳いだり釣りにいたり、鎌倉の大仏を見にくなど本当に楽しい夏休みを過ごしたようである。日本家屋で靴をはいて歩くプラインの姿を思い浮かべると滑稽でもあり、子どもたちが裸足で喜んで家のなかを走りまわる姿も楽しい。

八月二十九日に書かれた日本からの最後の手紙は病気の為に帰国せざるをえなくなったプラインの悲しみを伴う短い文面である。これまで病気がことが書かれてなかっただけに驚かさされ、心の痛む手紙である。プラインは自分がホームを去っても今までと同じようにこの仕事の援助を続けてほしいと孫たちに頼んでいるが、日本を愛する気持ちが手紙に溢れている。最後のプライナード女史

の詩は割愛したが、羊飼いに守られる私たち小羊について書いた宗教的な美しい詩である。

彼女が日本から故郷のニューヨーク・アルバニーの孫や日曜学校、職業学校の先生や生徒に送った二九通の手紙は後に孫の手によって「Grandma's Letters from Japan」「おばあちゃんの手紙」として一八七六年、ボストンから日曜学校の子どもたちを対象として出版された。同書は横浜開港資料館に保存されている。

著書のミセス・プラインがミセス・ピアソン、ミス・クロスビーと共に米国婦人一致外国伝道協会から派遣された婦人宣教師として横浜に着いたのは一八七一（明治四）年六月のことであった。それは彼女にとっては晩年に近い五一歳のことである。混血児の救済と女子教育を目的として来日したもので、その年の八月二十八日には山手四八番館にミッシヨン・ホーム（亞米利加婦人教授所）を設立し、混血児の養育と女子教育を開始した。それから四年のちの一八七五（明治八）年十月、ピアソンは惜しくも病氣のために帰米した。

彼女はホームの子どもたちや女子生徒にとってだけでなく同僚や使用人たちにとっても精神的母親であり、太陽のような存在であった。また、総理として学校の将来をよく見通し、ピアソンやクロスビーの持ち味を充分に發揮させ全員をよく統率した人であった。包容力のある温かい人柄は「おばあちゃん」として慕われ愛されたが、それだけに彼女の帰国がどんなにホームの人々を悲しませたか、しばらくの間はその空虚さに呆然としていたとある。（註2）植村正久は「臍（ろう）長けて威儀犯すべからざる顔に慈愛を堪へたるプライン女史」と回想している（註3）

プラインは帰国後、病癒えて再び婦人宣教師として中国の上海で奉仕したが、一八八五年二月一〇日、故郷のアルバニーで亡くなった。六四歳であった。

ところで、このホームから日本の幼児教育の黎明期に活躍した人々を多数輩出したことは大変興味ぶかい。これについては既に（4）で述べたのであるが、プラインたちの献身的な姿に心うたれホームの募集広告を書いた

のは中村正直であった。彼は後に東京女子師範学校摂理として附属幼稚園（現・お茶の水女子大学附属幼稚園）を設立し日本の女子教育、幼児教育の黎明期に大きな貢献した人である。また、これら婦人宣教師に接した僧侶、関信三（安藤劉太郎）が同師範学校附属幼稚園の初代園長として活躍したことも興味ぶかい。

また、卒業生のなかには日本で最初の私立幼稚園、桜井女学校附属幼稚園を設立した桜井ちかがあり、児童福祉事業の先駆者で相沢託児所ほかを設立した二宮わか、医学を学び後に頌栄幼稚園の園長となった西田けい、東京女子師範学校附属幼稚園の保育の実況を描いた女流画家、武村耕靄など、幼児教育の草分けとして活躍した人々が輩出した。さらにこのホームで働いた婦人宣教師たちのなかには日本で最初の私立の保育者養成課程を桜井女学校に設立したミセス・ツルーなどがある。こうした人々が輩出したのは、婦人宣教師たちのホームでの働きや心意気が接する人々に大きな感化を与え、これが日本の女子教育、幼児教育への草分けに繋がったと考え



◀ 混血児に囲まれたブライン

る。

「おばあちゃんの手紙」を読み終わって私はピアソンが時代や人種を越え、とても身近な「おばあちゃん」として親しく感じられてならない。善意と親切、ユーモア

と楽しさ、そして何をも恐れぬ信仰をもつミセス・ピアソンの姿が手紙を通して生き生きと伝わってくるようであった。混血児を自分の子のように愛したブラインの姿をこの写真からもかいま見ることができようであろう。

混血児の教育は明治二四年九月まで二十年間つづかれ廃止された。(註4)そして、このホームは横浜共立女学校(現・横浜共立学園)として女子教育機関として現在へと発展していったのである。

明治初期の混乱期に日本の行政から全く放置され、社会の恥として人々から蔑まれていた混血児たちを慈しみ養育して一人の女性として教育したこのホームの婦人宣教師たちの功績は特筆すべきである。人権問題が高くうたいあげられる今日、混血児の教育問題は過去のことではなく現在の日本および世界がかかえている問題である。

「おばあちゃんの手紙」はキリスト教伝道の色彩が強く、抵抗を感じた読者もあったと思われる。明治初期に宣教師として来日し、日本の文化や伝統をよく知らない

ミセス・ブラインの手紙はその時代を配慮したうえで読んで頂きたいと思う。

終わりにあたって邦訳のご指導を頂いた友人の平あい子、ミス・スピーチリーに心から感謝し、またお世話になった横浜開港資料館、ならびに横浜共立学園にお礼を申しあげたい。

(国立音楽大学)

(註1) I am so glad that our Father... 聖歌 65

4番「神のお子のイエスさま」日本福音連盟聖歌編集委員会 いのちのことば社

(註2) 「横浜共立学園120年の歩み」横浜共立学園 一九九一年 五八頁

(註3) 同右 五七頁

(註4) 同右 八五頁

※ このシリーズは今回で終わります。二年間にわたりご愛読ありがとうございました。

(編集部)

# 手をつなく

田中 三保子

保育の中で何気なく、あるいは意識的に子どもと手をつなぐことはよくある。身体の表面積からみれば僅かな手と手の触れ合いが、気持ちを伝えあう大事な手段となることを実例を通して考えてみようと思う。

M子は三歳児で入園してきた。母親とは抵抗なく離れたが、初めは緊張した表情をしていた。私のそばに寄ってくるでもなく、へやのまん中あたりに一人で黙って立っていることが多かった。

私は慣れない子どもや要求の強い子、あちこち動きまわる子などの対応に追われていて、それでも時々声をかけてみるが、返事は得られないでいた。今はまだ緊張しているから声が出せないけれど、慣れてくれば自然に話せるようになるものと、私はそのことをあまり気にもとめないでいた。

けれども二週間経っても三週間経っても、M子の口からは一言も聞くことはできなかった。どうしてしゃべらないのだろうか、私はかなり気になり始めていた。

M子の母親はいつも年子の弟を二人連れて登園してき

ていた。一人を抱いて、一人の手を引いているので、M子までは手がまわらないようであった。その様子から、M子は本当は母親に甘えたいのを我慢してきたことが察せられた。けれども、そのことと幼稚園でしゃべらないこととがどう結びつくのか、M子の園での様子からはよく分からなかった。

もしM子が家で自分を抑える生活をしているのであれば、せめて幼稚園ではM子の気持ちそのままが出せるようにしてあげたい。自分からは何の要求もしてこないで、私の方で気を配ってM子の気持ちを汲みとるよう心がけた。騒がしいのと、男の子は好まないらしく、そばに近づかないが遠まきには様子をながめている。特に何か作ったり描いたりしているのには関心があるらしく、じっと見ている。机の周りに人が少なくなつて静かになると、椅子に腰かける。紙が欲しいのとたずねると、小さくうなずく。紙を渡すと、ほかの子どもたちもやっていたことを自分なりにやってみている。それも、似たようなことを納得するまで毎日繰り返してやっ

てきたものは大事そうに持ち帰った。

素振りや目の表情から、だんだんとM子の気持ちが見とれるようになってきた頃には、頼みたいことがあるとM子の方から傍らにきてくれるようになった。私の周りにいる子どもたちを避けるように、距離をおいてついてきたり、背後で待っているだけなので、それと気がつかないこともあり、そんなときにも私が気づくまで辛抱強く待っていたようだった。

一学期末の母親との話し合いで、母親が家で仕事をしていることがわかった。M子は家ではほとんど遊びらしい遊びをせず、弟たちの世話をして過ごしているらしい。"そういう生活でも特別不満があるようには見えません。たまに手が空いてつないであげようとしても、きょうは先生につないでもらったからいいのと言います。家では幼稚園のことを色々話してくれます。自分の遊びができて嬉しいようです。"と母親は話してくれました。

一学期の間、M子は確かに、園で不満を解消するため

と思える行動は全くしなかったし、控え目ではあるがそれなりに楽しんでるようにみえた。幼稚園で必要以上に無理をしているともみえないのに、どうしてしゃべらないのであろうか。M子の心の中に何か乗り越えがたい壁があつて、そのために、言いたいことはあるのに言葉として発することができないように思われる。M子はその壁を自分で乗り越えられるようになるまで、気長に気持ちについていこうと思つた。

二学期になつても、M子の様子は余り変わったようには見えなかつた。

十月になつて、教育実習の二期が始まつた。M子は私のそばに寄らなくなり、実習生について歩くようになった。忙しそうに動きまわっている私よりたくさん相手をしてもらえると分かつてのことであろう。時々手をつないでもらっている姿は満足げに見える。

そして、ふざけだしたのである。舌を出してドアをべろりとなめたのが始まりだつた。そうなるといつても目だけではしか表情の読み取れなかつたM子の顔が崩れ、にや

にやして止まらなくなつた。机をなめる。椅子をそーっと引き出し、そーっと倒す。反応を確かめるようにちらちらと私に視線を走らせるが、ゆるんだその表情には晴やかささえ感じられた。M子は自分で壁を壊そうとしている。私はただ黙つて見ているしかなかつた。

教育実習が終わつた後もしばらくは、M子は椅子を倒したりしてふざけ、私の反応を試しているようだった。そうでないときには、手を出すとつないでくるので努めて手をつなぐようにした。忙しいのを察してか、初めのうちは私がつなげるようになるまで少し離れたところで待つていたが、やがて、早くつないでと言いたげに私について歩き、すぐそばまで来て手を出して待つようになつた。一度つなぐと自分からはなかなか離そうとしないので、私の片手はふさがることが多くなつた。しっかりと私の手を握つて、M子はどこへでもついてくる。何かをしたいというより、手をつなぐこと自体を味わっているように感じられた。今まではそうしたくとも遠慮していたのである。M子なりに少しずつ自己表出し始めた

ことを私は嬉しく思い、片手をM子に預けてしまうと、私の行動はかなり制約されてしまうが、できる限り意に添うよう努力をしていこうと思った。

M子は登園するとすぐに私と手をつなぎ、そのまま私の傍らで他の子どもたちをしていることをじっと見て過ごすことが多くなった。たまに友だちに誘われても手を離さないことが多く、何かやりたくなくなって自分から手を離しても、終わるとすぐに戻ってくる。

二月生まれのM子は身体が小さいうえ足指の関節が悪く、速く走ることができないので、急ぐときにはしかたなく断わって置いていくのだけでも（抱かれたり背負われたりは好まない）、以前のように部屋の中で待つことをしないで、たいてい必死に後を追ってくるようになった。

防災訓練の折には、一学期とは違って、何度促しても机の下にもぐろうとせず私の手を握って離さなかった。私が誕生会の司会役になった際には、訴えるような目で見つめられて、やむなく手をつないだまままで司会を勤め

た。

M子は自分に気持ちをかけてほしいと私に訴えかけているように思われる。本当はいつでも自分に向いていてほしいのだけれど、たくさんの子どもたちがいて、それが無理なことはM子なりに分かっている。分かっているけれど、でもできるだけ心にかけてほしいから、そのあかしとして手をつないでいてほしい。たとえ気持ちに他に向いていても、触れ合った手と手から心を通わせることはできるのだから、と。

十月半ばの遠足のときには、何人もの子どもたちが私と手をつなぎたがって団子状になり、とても並んでは歩けなかった。もちろんM子の手はつないでいるのだけれども、寄ってくる子どもたちの心情を思えば、その誰ともつないであげたいし、状況によっては別の子の手をしっかりと握る必要があつて、M子の手を離さざるをえないことも度々あつた。子どもたちの昼食の仕度を手伝い、いただきますの声をかけ、M子の隣に私の席をつくってから急いで手洗いに行つて戻ると、M子が泣いていた。



大粒の涙を流して声もなく秘そやかに泣いているのを見てびっくりし、気持ちをかけてもらいたい思いがそれほど強いことを改めて思い知らされた。その日、園に帰って子どもたちと別れた後、しばらくするとM子が母親と戻ってきた。何か言いたそうにもじもじして、何も言わずに帰っていった。一生懸命言おうとして多分喉元まで出かかったのに、言えずに飲み込んでしまった言葉は「さようなら」だったのであるうか、小さくなっていく後ろ姿を見送りながら私は思った。

遠足の一週間後の芋ほりのときにも、帰り際にM子は母親とやってきた。ちょっと口ごもって、それから小さいがはつきりした声で「さようなら」と言い、恥ずかしそうに、でも満足気な面もちで帰って行った。よかったと私は思った。一言でも口に出せたということは、壁がほんの少しは越えられたということなのであろうから。この時初めて、私はM子の声を聞いたことになる。それは思いのほか低く、抑揚のない言いかたであった。

幼稚園の生活の中でM子が初めて私にことばで意思を

伝えてきたのは、それより十日ほどたった餅つきの日であった。その日、私はお腹の調子のよくない子の世話にかなり手をとられていた。子どもたちがお餅をついたり丸めたりする手助けも忙しく、気になりながらM子にはあまり手を貸してあげられなかった。園庭から部屋に戻



るとM子が寄ってきた。一瞬何を求めているのか推しはかれず、試しに口元に耳を近づけてみると、ためらいもなく「棒がほしい」ということばが返ってきた。あつけないほどあっさり、M子は壁を乗り越えてしまったと、私はこの時思ったのだった。

この時から、M子は少しずつ話せるようになった。何か言いたそうにしているのを見てとり、口元に耳をよせると、たいていしゃべってくれるようになって、意思の疎通は容易になった。朝、登園するとしばらくは私と手をつないで過ごす、そのうちに何かやりだしたり、子どもたちのそばですることをしていたりもするようになった。ただ、低い声音と一本調子な言い方が相変わらずなのは気になる。それはM子の年齢とそのかわいらしい容姿には似つかわしくない気がして、まだ心の中に越えられない壁を抱えているのであろうことが推察された。

三学期になると、日によっては、M子は朝少し手をつなぐと私から離れ、黙々と何かつくったり、他の子の遊

ぶのを興味深げにながめたり、友だちに誘われて一緒にお店やをしたり、一日の大半をしたいことをして過ごせるようになった（降園後によく遊ぶ友だちが三人いるのだけれど、今までは園ではばらばらだったり誘われてもついて行かなかった）。手洗いにもたまにはひとりで行かれるようになった。

四月になって、今までのクラスがもちあがったところに十三人の新人園児を迎え入れた。

新人の子どもだけでなく三歳からの子にとっても、子どもたちが増えるなど、同じ幼稚園とはいえ環境が変わる。それぞれが安定した気持ちで遊べるようになるまで気をつけてあげたかった。M子は登園が遅いことが多いので、待つてあげて、できるだけ手をつなぐように心がけた。けれども実際にはそれはなかなか難しいことであった。新人の泣いている子や不安気な子たちとも手をつないで、少しは安心させてあげたいと思う。手が空いているときには、片手をM子とつないでも、もう一方で別の子とつなぐことはできた。けれどもいつまでもそうし

てはいられなくて、やむをえず片方の手に二人一緒につなごうとすると、M子の方は嫌がって離してしまつた。しっかりと自分だけを受けとめてほしい気持ちは痛いほど分かるけれど、新しい子どもたちとも信頼関係を作りたいと思うと、いつもM子を優先するわけにはいかなかった。

新学期になってから、M子はひとりで手洗いに行かなくなつた。連れていってあげればすませられたのが、終わるまで待つことを求めるようになった。そして五月の初め、M子は初めておもらしをした。着替えをしてあげながら、M子が「お手洗いにいきたい」と言えないほど緊張していたと知って、すまなかつたと思つた。と同時に、私は途方にくれてしまつた。私があとどれほど努力をしても、子どもが三十三人いれば昨年度と同じにはM子に気を配るわけにはいかないであろう。どうしたらよいのだろうか。

M子は、本当は母親に気持ちをかけてもらいたい、それが無理ならせめて手をつないでもらいたいと切実に思

っているであろう。小さいなりに家庭の事情が分かるから我慢をしてきて、その思いを私に託したのだと思う。私としてもできるだけそれに応えるべく努力をしてきたつもりであつた。でももうこれ以上のことが難しいとなれば、あとは母親に担ってもらうしかないのではないかと考え、私は母親と話をしてみることにした。

五月半ばに話をする、私がお願ひするまでもなく、三月いっぱい仕事は辞めましたと母親は言つた。残務整理があつたので完全に仕事がなくなつたのが三日前です。二日ほど下の子を置いてM子と二人で来ましたが、ずっと手を離さずこんなに大きく手を振って歩きます。こんなことがしたのかと思ひました。“と語ってくれた。私は心から安心するとともに、納得した。ここ二日間、M子は笑いが止まらないといった表情で登園してきていた。私がいつものように手を差しだし、身体で避けるようにしてまっすぐ水道のところへ行くので、おやつと思つていた矢先だつた。

母親が仕事を辞めたというのはやはりM子に大きな変

化をもたらしただろうだった。本当に大丈夫なのかを確かめるべく差しだす私の手はいつも無視された。そして、M子は今度は友だちと手をつなぎたがるようになった。自分から手を出してつないでもらっている。それだけでなく嬉しそうで、誇らしささえ感じられた。初めての友だちとつなぎたいときには私に頼みにくることもあって、ずいぶん積極的になったと感心させられた。園庭にもこだわりなく遊びに行かれるようになったし、友だちの数も増え、対等に遊べるようになった。不安定なときにだけ私と手をつなげば、自分の力で生活できるようになった。

一学期の終わりに母親に聞いたところによると、M子は母に、先生はちゃんと目を見て話してくれる、先生はこうやって手をつないでくれるなどと言っているそうである。忙しいのでついいい加減に相手をしていただけと反省させられています。”と母親は苦笑していた。

二学期になると、M子の声は初めから違っていた。相変わらず口数は少ないが、声はずっと高くなり、気持ち

のこもった話し方をするようになった。積極的に友だちとかかわり、時には相手の世話までやくようになった。あれほど嫌がっていた男の子とも手をつなげるようになって、周囲に向かってどんどん心を開いていくのが感じられた。

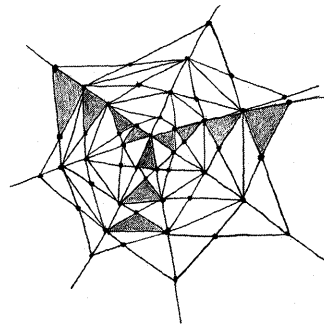
十月半ばのこと、私は子どもに頼まれて恐竜の絵を描いていた。背後で「おはようございます」と聞き慣れない声が出て、振り向くとM子が立っていた。不意をつかれてちょっとびっくりしている私には知らん顔で、まるでいつもそうしているというふうになささと流しに向かっていた。またもやあけなく、M子は最後の壁を乗り越えていった。

今、M子は手をつなぐ名人である。友だちとも私も、初めて会った実習生とも、つなぎたい時に実にさりげなく手をつないでいる。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

# マフラー作り (一)

松井 とし



ある年の木枯しが吹き始める頃、初めて四歳児の子どもたちとハンドニットイングを試みた。新教育要領のもと、今では環境構成のあり方は難しい課題であろうが、当時の私は「楽しいことをたくさん見つけようね」といった気持ちで、いろいろな活動をさりげなく始め、興味を持った子どもたちと一緒に日々の生活を楽しんでいた。ハンドニットイングとはいっても、開いた五本の指に毛糸を交互に絡めていくと、手のひらの側にゴム編みがどんどん長くつながっていくというものであった。女兒の中にはとても楽しんで降園までに仕上げてしまった子や、家に帰ってから一人で作り上げたという子どももいたが、個人差の大きな四歳児、特に男児には難しかったのかも知れない。せっかくなり始めても、中断したまま次の日に続きをしようとすると、毛糸がほどけてしまい、あとかたもなく

なってしまうこともあった。

しかしいつも、明るく、くったくがなく、じっとしてられないS男は、ふだんのようにすからは想像できない一面を見せてくれた。時々窓の外のサッカー仲間のようすを気にかげながらも、静かな部屋の片隅で傍らの女兒と楽しそうに言葉を交わしながら、一心に小さな手を動かしていた。何日もかけて自分で工夫し、途中で毛糸を変え首のところで結んだ時に、左右の色が違う独創的なデザインのマフラーが出来上がった時の、彼のうれしそうな表情がほほえましく思い出される。友だちから驚かれたり、誉められたりしながら、ひとりでニコニコと笑みがこぼれてしまうような彼を見ていて、私もとてもうれしく思い、感動した。S男はこのマフラー作りを通して、物事にじっくりと取り組み、創造する喜びを経験し、彼自身新たな自分に出会ったのではなかったかと思われた。

ちょうどその頃クラス懇談会があり、母親たちも大いに興味を示したので、作り方を説明した。その折に、今回この活動に興味を示さずサッカーに興じていても、別の機会に必ず同じような活動に出会うことになると思うので、子どもたちの形に残らない、主体的な生活を認めて温かく見守って欲しいと話した。ところが次の朝、ある男児が「お母さんがね、僕もマフラー作ったら時計買ってあげるって」とポツンと言いに来た。

(つづく)

かるーい読み物のページ

## 「猫の見た子供たち」

K・M・H

明治の小説家が、余り子供好きではないように思えるのは、私の偏見でしょうか。例えば、夏目漱石。何しろ、彼のデビュー作とされる『吾輩は猫である』に登場させられる子供像……。それは、子供嫌いらしい「猫」の目から描かれているせいか、何とも愚かしく滑稽でおせじにも「天使のよう」などとは言えそうもありません。

まずは、猫の目を借りて、作品の舞台たる主人一家の内側を覗いて見ましよう。

主人公は教師、この家には三人の子供がいます。

ご存じ、とん子、すん子、めん子のいずれも娘ばかり。彼女たちは、こんなご面相では大きくなったらどうするのだろうか、猫までが案じるほどの不器量娘で、長女のとん子は「南蛮鉄の刀の鏢のような輪郭」、次女のすん子は「琉球塗りの朱盆」、そして、「坊ば」と呼ばれる三女のめん子だけは、やたらに「横に長い顔」をしているようです。猫はその長さに呆れつつ、「いかに流行が変化しやすかったって、横に長い顔がはやることはなかるう」と評しています。

猫が呆れ返るのは、子供らの不器量ぶりだけでは  
ありません。言語道断なのは彼らのわがままぶり……  
。何しろ「自分のかつてな時は人を逆さにした  
り、頭へ袋をかぶせたり、ほうり出したり、へっつ  
いの中へ押し込んだりする。しかも吾輩のほうで少  
しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追  
回して迫害を加える」というわけです。



さらに、猫から見ると、人間はかなり愚かな生き  
物のようですが、とりわけ、子供はその典型で、た  
びたび猫たちを呆れさせています。例えば、長女の  
とん子の言葉の間違ひと言ったら……。この娘はど  
うやら「お茶の水の幼稚園」に通っているらしいの  
ですが、本人は「お茶の味噌幼稚園」の生徒のつも  
りです。七福神のお二人は「恵比須・大黒」ではな  
くて「恵比須・台所(だいどころ)」ですし、「元禄

袖」ではなくて「双六袖」。裏店(うらだな)に  
を勘違いして「わたしや藁だなの子じゃないわ」と  
威張っていたようです。

ある朝の光景は、猫に、人間は自分たちより愚か  
に相違ないと確信させます。主人夫婦がまだ寝て  
いる時間に、起き出して来た二人の子供が、向かい  
合って食卓に座りました。砂糖壺が真ん中に置いて  
あったのです。上の子が、先ず、自分の皿に一匙、  
すると小さいほうも姉のした通り、同じ分量を同じ  
ように一匙。姉が、また一匙、妹が同じようにもう  
一匙、続けて、姉が一匙、妹が負けずに一匙……。  
そして、二人の皿には砂糖が山盛りになり、その  
代わり壺の中は空っぽになったそのとき、主人が起  
きてきたのでした。寝ぼけ眼をこすりこすり、主人  
は食卓に近付き、二人の皿を取り上げると、せっか  
くの砂糖をアツという間に元通りに壺の中に戻して  
しまいました。二人の姉妹は、真剣そのもので精根  
こめて分配した砂糖を、一度も嘗めるひまさえ無



かったのです。

猫は、しみじみと慨嘆します。「人間は、利己主義から割り出した公平という念は猫よりまさっているかもしれないぬが、知恵はかえて猫より劣っているようだ」と……。



ところでこの猫は、なかなか観察力にも優れているようです。何しろ、三人の子供の洗顔風景や、それに続く食卓の場面を何ともいきいきと描き出しているのですから。

朝の洗面所で、女の子三人が顔を洗っています。もっとも、顔を洗うと言ったって、上二人が幼稚園児、「坊ば」と自称する下の子に至っては姉のあとについて幼稚園にすら行けないほどの年齢ですから、まともなことが出来よう筈もないでしょう。坊ばなどは、バケツの中から濡れぞうきんを引っ張り

出して顔を撫で回し始めます。さすがに姉がたしなめてそれを取り上げると、坊ばは「いやーよ、ばぶ」とばかり、それをまた取り戻してしまいます。

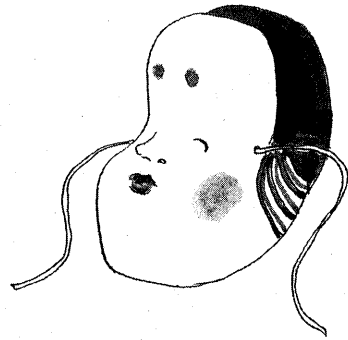
この「ばぶ」なる言葉は、いかなる語源に由来するのか、誰にもわからないのですが、坊ばが癩癩を起こしたとき、使用する特権的な言葉らしく、「ばぶ」の一言に皆が参ってしまうようです。「泣く子と地頭には勝てぬ」などいう、日本の諺を猫が知っているとも思えないのですが、どうやら、坊ばの「ばぶ」が神通力を持つらしいと、猫は見抜いてしまったのでしょうか。

長女と三女が、ぞうきんの顔拭きをめぐってごたついている間に、次女は、お白粉びんに指をつっこんでお化粧に余念がありません。白粉びんから取り出した白粉を鼻の頭にキュー。顔の真ん中に縦に一本、真つ白な線が通って鼻の在りかがハッキリしてきます。女の子は、そんな顔をきれいだと思ったのでしょうか、続けて頬に白い塊を塗り付ける……。

そこへとんで来た下女が、濡れた坊ばの着物を拭いたついでに、その子のせっかくのお化粧も、アッサリと拭き落としてしまいました。やれやれ……。

やがて、食事が始まります。坊ばはここでも傍若無人、自分の小さい茶碗が気に入らず、姉のを分捕って格闘します。何しろ、柄にもない大きな茶碗と長い箸ですから、扱いかねて暴威を逞しくせざるを得ないのでしょ。

二本の箸を一緒に握ったまま、うんとばかりに茶碗の中に突き立て、その箸を力一杯茶碗の底からはねあげて、小さな口の中に入るだけのご飯粒をかつこむ。はみ出した米粒は、鼻の頭と頬つべたと顎とに、ヤッとばかりに飛びつき、さらに、畳の上にもこぼれ落ちるといふことになるのですが、ご本人はそのくらいのことでは閉口するどころか、相変わらず暴威を振るい、えいヤッ、えいヤッと、ご飯茶碗との格闘を繰り返すのです。いやはや、無能無才の小人ほど、いやにのさばり出て柄にもない官職など欲



しがるものだが、その萌芽は既にこの坊ば時代から見られると、猫は洞察し、人間には教育や薰陶など効果がないのだと諦め顔です。

一方、姉のとん子は、坊ばのこの有り様に「あら坊ばちゃん、たいへんよ、顔がごぜん粒だらけよ」

と姉さん気分で注意し、坊ばの顔の掃除に取り掛かります。そして、一つ一つとご飯粒を取りのけつつ、それを口に運び、取っては食べ取っては食べして、とうとう妹の顔中のご飯粒を全部食べてしまいました。

ご飯粒を取って捨てるのではなくみんな口に入れてしまう、この思いがけない行動に、猫は、一寸だけ、びっくりしたようです。何しろ、こうした行動は、男性には、恐らく見られそうもないことなのですから。つまり、とん子が示したのは、一種の母親的な振る舞い方で小さいながら自分は、れっきとした女性であると宣言しているということも出来るでしょう。

しかし、この母性的なとん子も、実は、とんでもないことをしていました。妹の小さい茶碗で食べているものですから、すぐなくなってしまう。ご飯をよそっては空にし、よそっては空にし、さっさと四膳も食べ終えて、五膳目となると一寸迷いが起

きる、食べようかどうかというわけです。

とん子がやっと決心して、もう一膳食べようとご飯をよそおうとしたとき、一寸したハプニングが起きました。余り大量のご飯を小さな茶碗に押し込もうとしたために、ご飯の塊が畳の上に転げ出してしまったのです。ところが、彼女、悠々たるもの、驚く気色もなく、それを丁寧に拾い集めると、平然とお櫃の中に返してしまつたのでした。これには、猫も少々辟易、「少しきたくないようだ」と呆れ返つた次第でした。

傍らで、黙々とたくあんをかじっていて、これまで無難にすごしていたすん子にも、災難が訪れます。大好きな甘藷が味噌汁に入っていたため、喜んで勢いよく口の中にほうり込んだ途端、熱いものの、大人ですら火傷しそうな熱さだったからたまりません。彼女は「ワッ」と叫んで、口中のさつま芋を食卓の上に吐き出すという騒ぎになりました。

猫は、この情景に対して、皮肉たっぷりこんな

感想を述べます。「すん子のごとき、さつま芋に経験の乏しい者は、狼狽するわけである」と……。しかし、子供はさるもの、猫のしたり顔の解釈などご吹く風とばかりに、目の前に転がってきたさつま芋に感激した坊ばは、さっそく手掴みでむしゃむしゃとやり始めてしまいます。「さすが、子供たち」と拍手喝采したくなくろうというものではありませんか。



さて、こんな食事風景のなかで、子供たちの父親たるこの家の主人は、どうしていたかと言えば、一言も言わずに、専心ご飯を食べ汁を飲み楊枝を使っていたとあります。「娘の教育に関して絶対放任主義をとるつもりと見える」と、猫は呆れて見せません。でも、恐らく、こうした日常の細々したことは、口をはさまないのが、明治の父親というもので

しょう。

でも、この父親、子供の成長に対して、必ずしも無関心ではないようです。三人の娘がまた大きくなったと思うと、後ろから追っ手に迫られるような気がするらしいと、猫が同情しているのですから。三人の娘たちをちゃんと嫁がせるまでは、何としても親の責任と考えているからなのでしょう。

そんなに心配なら、子供など作らなければよいのにと猫は思います。そして、「いらざることを捏造して自ら苦しんでいる人間」を、愚かしい者と哀れむのです。

ただし、こうした文章の背後からは、猫に哀れまれつつもわが子のごとで心を労する、そこが人間の間人らしさであり人の親たる所以だと、猫ならぬ作者漱石の呟きが聞こえてくるのではないのでしょうか。

ある日の育児日記から

(38)

佐藤 和代



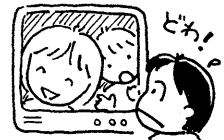
有は、車や電車が大好き。圭と同じように（つまり、人形やぬいぐるみや、動物の絵本などにこまれて）育ったはずなのに……。やっぱり男の子は生まれつきこういうものが好きなのでしょう。圭のお姫様ごっこにもあきれた私ですが、有の車好きにはもつとあきれています。

家に一冊しかなかった電車の絵本を、毎日毎日見ているので、とうとうミニカーと電車のおもちゃを買いました。これがもう、どこへ行くにも離せないのです。食卓に持ちこみ、ごはんを食べさせる（車に！）。寝るときは一緒に布団をかけ

て、上からとんとたたいてやる（有は眠るとき、背中をとんとたたいてもらうので）。まったく、車や電車でこんなふうに遊べるなんて知らなかったわ。あれは、床を走らせるだけのものじゃなかったの？

こうなると、男も女も同じ様に育てなきゃ、なんていう気負いはへなへなとしぼんでしまうのです。思春期になればまた違うのでしょうか、どね。

お父さんは、また違う感慨があるようです。私には「車が同じところをぐるぐる回ってるだけなのに、どうして三時間も観てるの？」と冷たい目で観られてしまうF1。最近では、有と二人で仲良く観ています。仲間ができてよかったね！



ビデオカメラを買いました。カメラにさわってたから、すぐよってくるので、アップばかり。

# 堀合先生に学ぶ(11)

立川 多恵子

今回はゆっくりペースの子どもが、園生活で友達とごっこ遊びを楽しむようになったその成長の過程を追ってみたい。

## ◇ 出会い

入園当初の晴彦は言葉がはっきりしなかったたので園内には自閉症ではないかと心配する人もあった。(保育界では言葉が出なかったり、はっきりしなかったりするとすぐ自閉症ではないかなど、心配する傾向がある。)

私も晴彦に出会ったばかりの時期には、高い声で話す

彼の言葉は理解しにくかった。その上表情も固いので、緊張感の強い子どもではないかと考えた。緊張のあまり言葉がはっきりしなかったのかもしれない。入園当初の彼は保育室で積木を並べたり、ミニカーを動かしたりして遊んでいることが多かったが、他の子が傍に来て触っただけで、「キーキー」と大声を出して騒いだ。

## ◇ 安定して遊び出す

それでも年少組の半ば頃には、一人で落ちついて遊ぶようになった。堀合先生に「晴ちゃん安定して遊ぶよう

▶ 一人で落ちついて遊ぶ



になりましたね」と話すと、先生は「そういえば、最近  
は余り『キーキー』言わなくなったわね」と言われた。  
先生は晴彦を特別視していないようである。

先生は個々の子どもが環境と出会って、その子なりの  
遊びを展開することを非常に大切にしている。したがっ  
てクラスの子どもたちは登園すると自由に遊んでいる  
が、お弁当の時間になると、自然にどの子どもも保育室に戻  
ってくる。そんな時、先生は「晴ちゃん、まだかしら」  
と呟く。そして園庭を見回し、下靴に履き替えると、砂  
場の方に走り出す。

砂場では晴彦が一人だけ残って遊んでいることもあ  
る。先生は「晴ちゃんお弁当よ」と声をかけるが、傍で  
遊具をかたづけながら晴彦が遊びを止めるまで気長に待  
っている。決して無理に手を引っ張って連れ戻すことは  
ない。

入園当初は庭にも出なかった晴彦であるが、最近では砂  
場遊びが大好きになって、砂場にいる時間の方が多くな  
った。

年少組の時は、「晴ちゃん戻って来たかしら」と言いながら、晴彦をホールや園庭に迎えに行く先生の姿を見かける日が多かったが、やがて子どもたちの中に「先生、わたしが晴ちゃんを探してくる」という子が出てきた。一番先に言い出したのはみちるである。彼女は先生の助手役の好きな子どもである。先生は「ありがとう」と言ってみちるに晴彦のお迎えを頼んだ。しかし折角みちるが迎えに行っても、晴彦は「今日はお帰りなし」と叫ぶことが多い。

面白いことにロッカーの中に自分の世界を作って先生のをやることや、友達のをやることを見ていたあかりが、先生の「晴ちゃん戻って来た？」という言葉を台図のようにして、晴彦を迎えに行く役割をとるようになる。このことについては七月号でも触れているが、先生は「私がみちるをほめすぎたから、あかりが迎えに行くようになったのではないか」と気にしていた。先生は「ほめられるからやる」といったことが好きでない。子どもの主体性を阻害することを嫌い、子どもが自分で判断して行動に

移せるようにと考えている。

#### ◇ 園生活のリズムがわかる

晴彦の迎えも年中組になると、数人の男の子になり、グループで迎えに行くようになる。それでも晴彦の方は相変わらず、遊び足りないのか「今日はお帰りなし」と叫ぶ。迎えの子どもたちは晴彦が遊びをやめるまで、傍で楽しそうに語らいながら待っている。先生のゆとりが子どもたちにも伝わっているといえよう。

お弁当の時間やお帰りの時間になって、晴彦が自分から遊びを止めて保育室に戻るようになったのは年中組に進級してしばらくしてからである。

晴彦の育ちを見ると、子どもが園の生活リズムを自分のものにするのは結構難しいということがわかる。大人は従来の生活パターンを早急に子どもに押しつけて、自分を安定させたがる傾向が強い。先生はそれをさけて、子どもがその気になるのを待った。一人ひとりの子どもの特性を尊重したいからである。



◇ 必要な時、先生を頼る

晴彦が「先生！」と駆け込んできた。私は何ごとが起こったか見守った。晴彦は「うめ組の子が裸足になって  
いるから僕もなる」と早口に訴えた。先生は「そう、い  
いわよ」と言いながら、手早く靴と靴下を脱がせて「終  
わったら先生に声をかけてね」と伝えた。

晴彦は大きく頷いて再び砂場に戻って行った。

私はその時「晴ちゃんが積極的に先生を頼るようにな  
った」と感じた。長い間先生は晴彦を迎えに行くばか  
りでなく、子どもたちが呼びに行ってくれるようになって  
も、後からくる晴彦のために先生の傍に椅子を用意し  
て待っていた。先生のクラスは降園のためのお集まりの  
席も子どもが選択している。

晴彦が保育室に戻ってくると、靴下を取り替えたり、  
上履きを履かせたり、いたれりつくせりである。傍で見  
ている私はもう年中組なんだから、自分でやらしたらど  
うかと、批判的になったこともあった。しかし先生は焦  
らず、押しつけず晴彦の世話を黙々と続けた。過保護に



▶ 裸足で砂場

見えるこうした世話が先生に対する晴彦の信頼感を徐々に育てたといえる。

先生は一人ひとりの子どもが自立するまでどんな援助も惜しまない。それが子どもとの信頼関係を育てる原点と考えるからである。

#### ◇ 友達と遊ぶ楽しさを知る

「うめ組の子が裸足になっている」と訴えて、先生に裸足にして貰うと、晴彦は砂場に戻って自分の作った池の中に足を入れてパチャパチャやり出した。そのリズムは傍で晴彦と同じように池でパチャパチャやっている子のものでそっくりである。晴彦が他の子のリズムに合わせて楽しむようになったと感心して見ていたら、今度は晴彦の方がリズムを変えた。それに友達が合わせる。

相手に合わせてパチャパチャと楽しんでいるうちに、晴彦の方からリズムが生まれ、そのリズムが相手を刺激して楽しさを倍加する。相手に即して動くばかりでなく、自分で作ったリズムを相手に伝える。お互いの提案

が遊びを楽しくしている。みごとにコミュニケーションである。

その日は砂場の隅に深い池が掘られていた。その中に子どもたちが入ってビチャビチャしながら楽しんでいった。晴彦が突然「ねえ、僕も入れて」と言った。子どもたちの一人が「一人ずつだよ」と応える。晴彦は即座に「じゃあ、次やらせてね」と頼む。

遊びの満足が次の場面で相手の立場を考えて待つというゆとりある態度を生み出す。この間まで自分の主張が通らないと、ひっくり返って「キーキー」言って暴れていた晴彦なのに、と思うとこの一年間の晴彦の変化に驚く。

#### ◇ ごっこを楽しむ

しばらくして、再び幼稚園を訪れた私は、友達とごっこを楽しんでいる晴彦の姿に出会うことが出来た。晴彦はその日、朝からスーパーマリオのお面を作っていた。お面ができると早速先生のところに行つて帯をつけて貰

って、しょう太とマリオごっこを楽しむ。年少組の時の晴彦はお面作りには殆ど関心がなかった。たまに「やり出したな」と思っで見ていると、黒一色でグジャグジャに描いて、その辺に放り出して置くので、先生が拾っておいて後でお面にしてやるといった状態だった。

今日、晴彦が作ったお面はカラフルだった。お面に帯をつけて貰うと、早速それをかぶって遊び出す。晴彦たちのマリオごっこは園庭に出ても続いた。彼等は園庭でも走りまわり、格闘する。しばらくして晴彦はそのお面を自分の棚の中に入れてしまうと再び園庭に戻ってきて、カラフルな器をいくつも籠に入れて山のすべり台の上に並べる。そしてその中から三つを選んで山の下に持って行き、砂を集めて器に入れる。それを注意深く抱えて再びすべり台の上に運ぶ。そして再び空の器を手にして山の下に運び、砂をつめる。

こうした活動を晴彦が根気よく繰り返し続けていると、雄一郎がやってきて「入れて」と言った。晴彦は「いいよ」と応える。そして早速「トロピカルジュース



▶ 土管の冷蔵庫

にする？ パインジュースにする？」と訊ねる。晴彦は何度も山を上がったたり、降りたりしてジュース作りをしていたのである。

晴彦の「トロピカル？ パイン？」という問いに対して、雄一郎は「ほくもジュース作りたい」という。晴彦は少し困った顔をしたが、黙って器を抱えると山の下に降りて行った。その後を雄一郎も同じように器を抱えて降りて行く。二人はそれぞれの場所で器に砂を入れる。ジュースは次々に作られ、すぐ二十個位になった。その時、何を思いついたのか晴彦が「そうだ、いいこと考えた」と言った。私はこれから何が始まるか興味を持った。

ジュースの器が次々に山の下の洞穴に並べられる。晴彦が雄一郎に「冷蔵庫だよね」と言った。雄一郎と共通のイメージを持ちたかったのである。雄一郎は黙々とジュースの器を洞穴に運ぶ。

晴彦は次々に増えるジュースの保存場所を考えて、山の下で土管で作られた洞穴を冷蔵庫に見立てたのだ。晴

彦は雄一郎の「ほくもジュース作りたい」と言う言葉を受けとめた結果、二人でジュース作りをすることになり、ジュースが沢山できて、しまつて置く場所を考える必要を感じたのだろう。

友達とのごっこ遊びは面白い。相手のイメージによって、自分のイメージを変える必要が起こる。その結果トランプの起こることもあるが、ごっこに新しい変化や進展が起こる。このようなきっかけがグループでのごっこ遊びを一層楽しくする。

入園当初、他の子が傍に寄ってきただけで悲鳴を上げていた晴彦も、その子なりの育ちを大切にして、援助する堀合先生との生活の中で、今日も友達とのごっこ遊びに没頭して楽しむ。

(十文字学園女子短期大学)

# 編 集 後 記

息子が犬を飼ってほしいといいだした。娘が小さい時からぜん息だったため、犬、猫はお医者様から禁止されていたのだが、成長して体調も良くなってくると、家の外で飼うのなら良いのでは、と思うようになった。考えてみたら、私の父が動物好きで、私自身、たくさんの犬や猫、雉子やにわとり、あひるや小鳥の類に囲まれて育ってきた。それなのに我家の子ども達には何もいないのも可哀そうだ。

そんな時、近所のお宅から柴犬の仔犬をもらってくれる人を探している、という話があった。子ども達は大喜びで、すっかり飼う気になってしまった。所が、意外にも父親が反対。子ども達が何とお願ひしてもイエスといってくれない。

「おとなしいメスだし、トイレのしつけもきちんとできているし、吠えないし、外でも飼えるヨ。それにまだ仔犬だから可愛い。ねえ、ほしィヨ。お父さんには面倒かけないから。」それでも答はノー。

夜になり、仔犬の飼い主から電話があり、あちらの家でも家族の反対があり、悪いけれど仔犬は手離せなくなつたということだった。仔犬が来なくなつたのは残念だったが、まだ家族全員でむかえる気持ちになつていないので、内心ホツとした。

またチャンスはあるから、と子ども達の気持ちをなだめてはみたが、次のチャンスまでに、お父さんの説得の方が大変そうだ。

(K)

## 幼児の教育

第九十三巻 第二号

(一九九四年二月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

発行 平成六年二月一日

編集兼発行人 本田 和子

発行所 日本幼稚園協会

〒112東京都文京区大塚二―一―

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108東京都港区三田五―一二―

発売所 フレーベル館

〒113東京都文京区本駒込

六一―四一九

☎〇三―五三九五―六六〇四

振替口座 東京九―一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所「フレーベル館」にお願いいたします。



### 手づくり保育シリーズ①

## 歌ってだいすき —湯浅とんぼの 遊びうた傑作選—

子どもと保育者でつくるオリジナル歌遊び。保育の現場から生まれた遊びうた50曲に新しい遊びをつけ、替え歌をつけて、よりヴァリエティある生活を楽しめる曲集です。

湯浅とんぼ・著

B5判・104頁・定価2,200円(税込)



### 手づくり保育シリーズ②

## 布で作ったアイデアおもちゃ

軍手、タオル、ストッキングなど身近にある布素材を使って作るおもちゃの作り方ガイドブック。子どもの好きな動物を子どもといっしょになって作り、遊ぶことができます。カラーページ多数

鈴木美也子・著

B5判・96頁・定価2,200円(税込)



### 手づくり保育シリーズ③

## 思い出プレゼント

子どもたちが作った作品を、思い出いっぱいのプレゼントに手づくりしてあげます。友達同士のプレゼントや誕生会のプレゼントなどのヒントにもなります。原寸大型紙付き。カラーページ多数

島田明美・著

B5判・96頁・定価2,200円(税込)

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。



# 0、1、2歳児遊びのひろば(全3巻)



## 1. いっしょに遊ぼう

4・5・6・7月

## 2. いっしょに遊ぼう

8・9・10・11月

## 3. いっしょに遊ぼう

12・1・2・3月

心身発達のはげしく変化する乳幼児期の遊び方と保育者・母親のかかわり方を紹介した保育資料。遊びの内容はオールカラーイラストで表現され分かりやすく現場ですぐ役立つ。赤ちゃん誕生、入園記念に最適。

阿部直美・浅野ななみ・共著

B5変型判・各60頁・定価各2,200円(税込)・セット定価6,600円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンターブックの  
フレーベル館